

## 17 李東垣の瀉血療法

友部 和弘

中国伝統医学の歴史において、金元時代(一一一五〜一三六八)は、三大古典(『黄帝内経素問・靈枢』『神農本草経』『傷寒論』)の医学理論の統合が図られた時代である。内経以降、希少な治療法となった瀉血が、この時代にはいかなるものであったか。これを金元の四大家の一人、李東垣の著『内外傷弁惑論』『脾胃論』『蘭室秘蔵』(エンタプライズ刊『和刻漢籍医書集成』収載)で調査した結果、以下の瀉血関連記載(原漢文)を見いだした。

『内外傷弁惑論』には関連記載なし。

『脾胃論』。①卷二第四丁オモテ「如し汗大いに泄るる者は、津脱す。…三里、気街に三稜針を以て血を出す。

若し汗減ぜず止まざる者は、三里の穴の下三寸、上廉の穴に於て血を出す」。②卷二第十八丁ウラ「黄帝針経に云

う。前痛む者を視て、常に先ずこれを取らば、これ先ず繆刺を以て、その経絡の壅ぎし者を瀉す。血凝まりて為して流れざるが故に、先ずこれを去りて、しかして後に他病を治す」。③卷三第五丁オモテ「氣、臂足に在り。これを取るに先ず血脈を去り、後陽明少陽の榮輪を取る。二間、三間深くこれを取り、内庭、陷谷深くこれを取る」。

④卷三第五丁ウラ「その足臂の血絡を視て、尽くこれを取る。後にその痿癱を治す。皆、補わず、瀉さず、陰より深く取り引きてこれを上らず…」。⑤卷三第六丁オモテ「陰陽応象論に云う。その陰陽を審らかにして、以て柔剛を別かつ。陽病は陰を治し、陰病は陽を治す。その血氣を定めて、各々その郷を守る。血実せば宜しくこれを決すべし。氣虚せば宜しくこれを掣引すべし」。⑥卷三第六丁ウラ「経に曰く。陰病は陽に在るに…。必ず須らく先ず、絡脈経隧の血を去るべし。若し陰中の火旺んにして…、先ず五臓の血絡を去り引きて…病、自ずから去る…」。⑦卷一第十八丁ウラ「経に云う。中満の

者は…。温衣にてその処を繆刺す。これ先ずその血絡を

瀉して、後にその真経を調う。気血平となれば陽布神清し、これ治の正しきなり」。⑧卷二第三十八丁オモテ「目眶歳久しく赤く爛るるを治す。俗に呼びて赤睛と為すはこれなり。当に三稜針を以て、目眶の外を刺して、以て湿熱を瀉すべし。眼に倒睫拳毛を生じ、兩目緊く蓋うが如きは、内に火熱を伏して陰氣を攻めたり。…手法を用い内臉に挙ち出して外に向わしめ、針を以てこれを刺して血を出す」。⑨卷三第二十一丁オモテ「麥門冬飲子」吐血久しく愈ざるを治す。三稜針を以て氣街に於て血を出せば、立ちどころに愈ゆ」。

以上、九例の瀉血関連記載を検討した。

- (1) 引用書…『素問』三回、『針経(原『靈枢』)』二回の計五回。『脾胃論』『蘭室秘藏』とも約一一種の引用書がある。
- (2) 疾病の種類…具体的に記すのは、④痿癱、⑦中満、⑧眼疾(二例)、⑨吐血の計五疾病。

(3) 瀉血と薬の選択…痿癱に対し吐薬を禁じ瀉血を施し、腰痛には瀉血を禁じ薬を施こしている。腰痛に委中の瀉血は他書に多くみられるが、委中からの瀉血は、一般に出血量が多い。以上は東垣が治療をする際、ダメー

ジの少ない方法を選択しているとも考えられる。

(4) 瀉血部位…具体的に記すのは①(足)三里・氣街・上廉、③二間・三間・内庭・陷谷、⑧氣街で、手足の先方に多い。また、この部位は大量出血の可能性が極めて低い。

(5) 薬物の併用…①②以外は全て瀉血単独であったのは、江戸前中期の医家と相違する。

(6) 瀉血目的…『素問』三部九候論に「必先去其血脈而後調之」とあるごとく、先ず鬱血部より取血し、循環障害の改善を第一とする。

以上の結果が得られた。東垣の医方は、補土派と称され、当時戦乱続きで体力を消耗した患者に、脾胃を補うことを主眼とした。そして、その医方は今回調査した瀉血療法にも、少なからず反映されていることが示唆された。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)